

修士論文（要旨）
2014年1月

「教室における参加」から見る中国人大学院留学生の自己成長

指導 齋藤伸子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
211J3906
唐 旻

目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究背景と目的	1
1.2	本研究における「教室」	2
第2章	先行研究	3
2.1	教室における教師と学習者	3
2.2	中国人大学院留学生の成長にまつわる先行研究	3
2.3	教育学領域と心理学領域の「自己成長」に関する研究	3
2.4	実践共同体への参加にまつわる先行研究	4
2.5	本研究における「自己成長」の位置づけ	4
第3章	調査概要	5
3.1	調査期間と調査対象者	5
3.2	データ収集方法と範囲	5
3.3	データ分析方法	6
第4章	調査結果と分析	8
4.1	ストーリーライン	8
4.2	他者との相互作用による影響	11
4.3	ゼミという実践共同体に対する認識と行動の変化	16
4.4	発表と研究についての捉え方の変化	23
4.5	ゼミにおける課題遂行	26
4.6	成長への志向	32
第5章	総合的考察	36
5.1	他者との相互作用の観点から	36
5.2	実践共同体への参加と意識の変化という観点から	37
5.3	課題遂行能力の育成	37
5.4	中国人大学院留学生の成長が促されるポイント	38
第6章	まとめと今後の課題	39
6.1	まとめ	39
6.2	今後の課題	40

謝辞

参考文献

巻末資料

要旨

キーワード：大学院のゼミ、実践共同体への参加、他者、相互作用、成長

第1章 はじめに

本研究は「教室における参加」という視点から大学院のゼミという場を設定し、中国人大学院留学生がどのようにすれば自己成長を実現できるかについて考察しようとするものである。

第2章 先行研究

学校教育学の分野では、速水・西田・坂柳（1994）が「自己成長力」という新しい用語を提案している。そして、自己成長力とは「自ら自分自身を伸ばしていこうとする力」と定義している。

信野（2007）は「自己成長感」は、自らの努力によって苦境や困難な出来事を乗り越えられたときに敏感に感じられるものだと述べている。また、自己成長感を“ストレスフルな出来事のあとに生じる自分が成長したという感覚”と定義している。

「自己成長」に関しては心理学分野での先行研究において大きく分けて2つの定義がある。前者は「力」に限ったもの、後者は「感覚」を中心とするものである。それに対して、本研究では、学習者の変化あるいはストーリーラインから能力と感覚の双方を含む自己成長を見る。また、多くの研究では、「成長」は有益なことから生じるものであると考えているが、本研究においては、中国人大学院留学生が「危機」などという不利な状況から成長を実現するかどうかについても見ていきたい。

第3章 調査概要

調査期間は2012年6月～2013年10月であるが、三つの調査に分けられる。本研究では、調査対象者と一対一の対面式の半構造化インタビューを行った。

録音したインタビューデータを文字化し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（＝Modified Grounded Theory Approach、以下M-GTA）を用いて分析した。研究対象自体がプロセス的特性を持っているので、M-GTAによる分析が適切だと考えた。また、本研究は、事例研究ではない。つまり、三人のバリエーションからの概念と概念の関係の検討からのまとめである。

第4章 調査結果と分析

中国人大学院留学生の自己成長を構成するカテゴリーは、他者との相互作用による影響、ゼミという実践共同体に対する認識と行動の変化、発表と研究についての捉え方の変化、ゼミにおける課題遂行、成長への志向ということである。

その五つのカテゴリーは相互に関係し、相互に影響し働きかけると考えられる。まずは、ゼミにおける人間関係、すなわち調査対象者とゼミ生同士の間、調査対象者と先生の間、インターアクションが、調査対象者のゼミでの人間関係への対処法、[ゼミという実践共同体に対する認識と行動の変化]に影響をもたらすことが明らかになった。調査対象者のメンバーとしての

自覚が深まるに伴い、[ゼミという実践共同体に対する認識と行動の変化]の様子もうかがえた。そして、ゼミに参加しているプロセスでは、[他者との相互作用による影響]で[発表と研究についての捉え方の変化]もみられ、調査対象者のゼミでの発表に対する心理状態、研究に対する考え方にも影響を与えることが立証された。なお、ゼミの進め方、ゼミ生と先生との付き合い方についての望みも言及された。また、ゼミという実践共同体の参加を通して、社会に参加できるようになったという社会とのかかわりも明確になった。

第5章 総合的考察

前章の分析を基に、四つの視点から考察した。①他者との相互作用の観点、②実践共同体への参加と意識の変化という観点、③課題遂行能力の育成をめぐる観点、④中国人大学院留学生の成長を促すものをめぐる観点である。

また、中国人大学院留学生の自己成長が、すべて積極的な影響から獲得できるわけではないということがわかった。時々、調査対象者が感じた「ボトルネック」も自己成長を促す要素になると言える。大人である、研究者に向かっている調査対象者にとって、「満足感と達成感の喪失」「落ち込む状態に陥る」「危機感を感じる」などという困難は自分の成長に与えるもう一つの「機会」になると言える。そして、それらのような「機会」からの成長は今まで会えていない自分との出会い、想像したことのない側面の開きという自我アイデンティティの発達に密接に関係していると考えられる。

第6章 まとめと今後の課題

本研究では「ゼミという実践共同体における参加」と中国人大学院留学生の「自己成長」の関連性がみられ、「自己成長」に影響する要因も明らかになったと言える。成長したかどうかということとゼミからの「獲得」について、以下のようにまとめられる。調査対象者は「ゼミにおける他者」の位置づけ、自律的研究能力の育成、ゼミにおける課題遂行能力の育成により、発信者になることができるようになり、さらには、自我アイデンティティの発達及び社会適応力が身につけられたのである。

調査結果を参考に、ゼミの進め方を改善することが期待される。本研究は、ゼミへの参加にせよ対人関係にせよ、意識調査と行動調査を併せて行ったものであるから、結果の分析や、説明はしにくい。今後はゼミという実践共同体に限定せず、大学院の参加と社会の参加のプロセスの解明に取り組み、意識調査と行動調査を分け、意識と行動の差異を中心にして、中国人大学院留学生の自己成長力についての追跡調査を課題としたい。

参考文献

- 秋田喜代美, 石井順治(2006)『ことばの教育と学力』明石書店
- 有馬比呂志 (2010) 『中学生における自発的ピア・サポートが自己成長に及ぼす効果』
学校メンタルヘルス Vol.13, No.1 : pp.35-40
- 加藤好崇 (2010) 『異文化接触場面のインターアクション』東海大学出版会
- ケン・ウィルバー (著) 吉福 伸逸 (訳) (1986) 『無境界—自己成長のセラビ論—』平河出版社
- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂
(2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
(2006) 『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリーアプローチのすべて』
- 小野原信善・大原始子 (2004) 『ことばとアイデンティティ—ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し—』三元社
- 佐藤慎司・熊谷由理 (2011) 『社会参加をめざす日本語教育 —社会に関わる、つながる、働きかける—』ひつじ書房 pp. 175-206
- 塩谷奈緒子 (2008) 「教室文化再考—対話型の日本語教室活動における教室文化作りについて」細川英雄編『ことばの教育を实践する・探究する—活動型日本語教育の広がり』凡人社
- 新館啓一, 松崎学 (2011) 『教師の自己分析への PAC 分析の適用可能性に関する研究—筆者自身の新任期の自己成長を振り返ることを通して—』山形大学 教職・教育実践研究 6, pp.27-37
- 信野良太 (2008) 『自己成長感尺度作成の試み』北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集 11, pp.125-136, 2008-03
- 速水敏彦, 西田保, 坂柳恒夫 (1994) 『自己成長力に関する研究』Bulletin of the School of Education, Naogoya University (Education Psychology) 1994, Vol.41, pp.9-24
- 森本郁代(2009)「伝達から対話へ—大学での日本語教育の現場から—」小林ミナ, 衣川隆生編『日本語教育の学校・現在・未来 第3巻 教室』凡人社
- 李麗麗 (2011) 『中国人大学院留学生のアカデミック・インターアクションに関する調査—正統的周辺参加から十全的参加への過程の分析と考察—』桜美林言語教育論叢 7, pp. 17-31,
- 吉福伸逸 (1989) 『自己成長の基礎知識 1—深層心理学』春秋社
- 家根橋伸子 (2008) 『「自分のことを語り合う」ことを中心とした第二言語 (日本語) 教室活動における相互行為と参加の様相』広島大学院教育学研究科紀要 第二部 第 57 号 pp.273-282
- 家根橋伸子 (2011) 『交流型言語教室活動の理論と可能性—日本語教育への導入に向けて—』東亜大学紀要 第 14 号 pp.33-34
- Lave, Jean and Wenger, Etienne (1991)/佐伯胖訳 (1993) 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書